

第 4 章

子ども理解に基づく日ごろの指導援助

子ども理解に基づく一人ひとりに応じた日ごろの指導援助

- 1 児童・生徒への見方や感じ方の感度を高める
- 2 「困っている子ども」への理解と対応のポイント

学ぶ喜びを実感できる魅力ある学校づくりへの視点



第4章では、日ごろからの学校における取組をまとめてあります。教職員からみた「気になる子」について、「困っているのは子ども」という視点に立ち、背景の理解や関わり方のポイントを解説するとともに、魅力ある学校づくりへの視点をまとめています。

子ども理解に基づく一人ひとりに応じた日ごろの指導援助

今、学校では自らの力では解決することが難しい課題を抱えた児童・生徒への対応が求められています。児童・生徒の多様な教育的ニーズを把握し、適切に対応するために、児童・生徒一人ひとりの特性を見極めることが求められます。つまり、個に応じた適切な支援のためには、難しい課題を抱えてからの対応とならないように、日ごろから子どもを理解することが大切です。

1 児童・生徒への見方や感じ方の感度を高める

----- 「気になる子」いませんか？ -----

- 「学習が積み重ならない。」
- 「注意が散漫で、話を最後まで聞くことができない。」
- 「忘れ物が多い。」
- 「授業中に課題に取り組まない、取り組むまでに時間がかかる。」
- 「感情の起伏が激しく、かっとしやすい。」
- 「自分の考えを相手に伝えることが苦手。」
- 「休み時間は、自分の席で静かにしていることが多い。」
- 「週始めに休むことが多くなった。」
- 「近頃、登校時間が遅くなったり、逆になかなか家に帰らない。」等

「気になる子」の様々な状況が思い浮かぶと思います。それは、常日ごろから「気になる」場合もあるでしょうし、つい最近、「気になり始めた」場合もあるでしょう。また、担任である自分では気になっていなくても、隣のクラスの担任や、他学年の教職員から指摘されて、初めて「気がつく」場合もあります。つまり、「気になる」という感情は、見方や感じ方によってとらえ方が違うわけです。

そこで、日ごろから児童・生徒の様子を気にとめることで、見方や感じ方の感度を高めおく必要があります。なぜならば、感度を高めることによって、自らの力では解決することが難しい課題に遭遇した児童・生徒の困っている状況に、早期に気づくことができるからです。また、自分の力を振り絞って解決しようとしている児童・生徒が、援助を必要とするようになったときに、その心の叫びに耳を傾け、その子にとって必要なだけの援助を行うこともできるからです。このような早期の対応が、様々な背景から生ずる不登校などの二次的な課題の未然防止につながるのです。



一人ひとりに応じた適切な支援のためには、日ごろから子どもを観察し、児童・生徒への見方や感じ方の感度を高めることが必要です！

どのような特徴をもっている子どもだろうか。
困っているのは、どういうときだろうか。
課題の解決には、その子のどんな力が役に立つだろうか。
うまくできている（行動できている）のは、どういうときだろうか。

2 「困っている子ども」への理解と対応のポイント

教室には何らかの課題に出会い「困っている子どもたち」がいます。このような子どもたちを「支援が必要な子ども」として、いつでも受け入れられるような体制づくりが求められています。

そのためには、まず、子どもがどのようなことに困っているのか、さらに、対応のポイントとしては、どのようなものがあるのかを知っておく必要があります。

特に発達障害のある場合、その特性によっては同じような言動が表れることがあります。不登校などの二次的な問題を予防するためにも、発達障害の特性とその対応を教職員側が知識としてもっていることは、今後、更に必要となるでしょう。

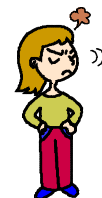
児童虐待や放任等、自尊心を砕かれた体験により、集団生活に適応しにくい状況になってしまうことがあります。子どもたちの表面上に描き出された問題行動そのものをどうするかという以前に、子どもたちは何らかの課題に出会っているのであり、その背景を見つめるといふ視点が重要になります。

本章では、「困っている子ども」への理解と対応について解説します。不登校という状態像を示す子どもたちの中には、学校に登校していた時期にも何らかのSOSを示している子どもがいます。そのSOSをキャッチする感度を高め、対応の手がかりとしてください。

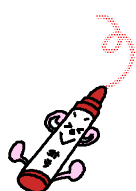
「困っているのは子ども」



(1) 「『我慢してなさい』とか『しっかりしなさい』って怒られてしまうことが多いんだ。」 p.70



(2) 「友だちとケンカになっちゃって怒られたり、ルール違反だと言われてることがあるんだけど、何をすればよいのかよく分からなかったんだ。」 p.72



(3) 「後でさあ、『しまった』って気がつくんだけどね。むかつく頭が真っ白になってキレちゃうんだよ。」 p.7



(4) 「『やればできる！がんばれ！』って言われるんだけどさ、私なりに一生懸命に勉強やってるんだよ。でも覚えられないし、授業分らないからつまらないんだ。」 p.76



(5) 「大人は気づいてないけどさ、時々疲れたって感じるとき、確かにあるよ！」 p.78



(6) 「せんせい！おなか、痛い（あたま、痛い）」 p.79

(1) 「『我慢してなさい』とか『しっかりしなさい』って怒られてしまうことが多いんだ。」

教職員から見た子どもの特徴

そわそわと落ち着きがなかったり、私語が多い。
我慢することや、待つことが苦手である。
じっくりと取り組めず、ケアレスミスが多い。
ぼんやりしていることが多く、人の話を聞いていないように見える。
片付けが苦手だったり、忘れ物をしたり約束の時間に遅れてしまうことがある。
課題や活動を計画的に順序立てて行うことが苦手である。
気分が変化しやすく、わずかなことで笑ったり、泣いたり、かんしゃくを起こすことがあるが、気分を引きずらず、何事もなかったように次の活動を行う。
興味が持続せず、活動を面倒だと感じたり疲れやすい。
べったり大人に甘えるときと、反抗的な態度を示すときなど感情の起伏が激しい。

子どもの様子を観察してみましょう

このような行動の背景には、情緒的な面と密接に関連している場合と、AD/H D（注意欠陥/多動性障害）等、発達的な課題から生ずる場合があります。

教職員は、子どもの気になる点に目がいきがちで、子どもの苦手な部分を改善しようとする結果、子どもに対する叱責が多くなる場合があります。

教職員の立場から子どもの立場にたち、子どもがどういう状況で何に困っているかを観察すると共に、子どもがうまく行動できている場面をよく観察してみましょう。そして子どもに関わる人たちが、次に述べる「関わり方のポイント」をおさえながら、子どものうまくいっている状況を意図的に日常生活や授業の中に組み込んでいくことで、本人に「やればできる」という達成感をもたせ、自信を回復させていくことが重要なポイントです。

子どもの日ごろをキャッチすると

子どもが困っているのは
どういうときですか？

昼前や午後の疲れがたまる時間帯には、集中力がなくなる。

初めての場所や活動だとハイテンションになり、落ち着きが更になくなる。

説明中心の特定の教科や、活動の少ない授業形態、蒸し暑い天候の日、臭い等が気になるときは、最初から落ち着きがない。

一度にたくさんの課題が提示されると、取り組もうとしない。

一斉指導だと注意が向かず、周囲の子の行動を見ながら遅れて行動をする。

特定の友だちや教職員と一緒にいるときにトラブルが起こりやすい。

友だちとトラブルを起こした後、どう謝ってよいのか分からない。

みんなと協力して話し合ったり活動をする場面になると、自分の思いが通らなくていらいらし、投げやりな言葉を発してしまう。

子どもがうまく行動できているのは
どういうときですか？

午前時間帯に集中できることが多い。

事前にその活動をする際のルールを確認しておく、と、落ち着いて取り組める。

教室環境から注意をそらすものを減らし、集中を妨げるものから離すと、気が散ることが少なくなる。
(座席の位置・掲示物等)

指示や活動内容が言葉で指示されるだけでなく、黒板やプリントに示されていると、言葉の指示を忘れても活動に取り組むことができる。

授業内容がテンポよく展開されており、説明の仕方も言葉の抑揚やジェスチャーを伴う場合は、注意が引き付けられている。

教材や課題は目新しいものを使って興味を向けさせたり、途中で実験や身体を使った活動が入ると集中が持続する。

集団での活動よりは二人一組での活動の方が落ち着いて取り組める。

校庭等の広い場所では気が散りやすいが、図解等の教材を提示すると注意を喚起できる。

苦手な活動と得意な活動が交互に取り入れられると、興味を持続することができる。

注意を引こうとする言動にはあまり取り合わず、短時間でも子どもの話に耳を傾ける時間をもつと安定してくる。

じっくり話したいときは、静かな部屋で、個別で話の目的と時間の見通しをもたせて行う。

子どもがうまく表現できない気持ちを大人が代弁し、本人や周囲に伝えることで安定する。

過剰なエネルギーを休憩時間に運動し消費することで、次の授業への導入はスムーズになる。

関わり方のポイント

良いところを褒め、やる気を引き出しましょう。大声での叱責は逆効果です。

たとえ望ましい結果が出ないとしても、本人が努力しようとしている姿勢を認めていきましょう。また、少しでも変化があれば見逃さず褒めていきましょう。子どもは少しでも自分のがんばりを認めてもらえることを待っています。

興奮しているときは、諭したり叱ることは逆効果です。その場を離れクールダウンしてからつらかった気持ちをじっくり聴き、次はどう行動したらよいか、本人とできそうな方法を一緒に話し合しましょう。

「～はだめ」「～してはいけない」の言葉に敏感に反応します。「～しましょう」の肯定的な言葉がけを落ち着いたトーンでしていきましょう。

子どもの得意な力を引き出していきましょう。

その子どもの苦手な部分を引き上げるのではなく、その子が力を発揮でき、クラスの中で認められるような活動を計画し、自信や存在感をもたせていきましょう。

他の子どもと比較せず、本人のペースを認めたり、ユニークな発想を受け入れたりしましょう。



必要なルールは事前に具体的に伝えておきましょう。

トラブルになってから叱ったり諭しても、子どもにとっては「どうせ自分は～」と自己評価を下げることに繋がりがやすいため、事前にルール確認を行い、不測の事態を具体的にシミュレーションをしておく、落ち着いて取り組むことができます。

子どもが事前に納得して決めた約束は、先生との信頼関係を基盤に守ろうとがんばります。その姿勢を褒めていくことで子どもの自己肯定感を高めていきましょう。

友だち関係の調整が大切です。

トラブルが起こったときの謝り方や関係の修復の仕方は、最初は大人が調整役をし徐々に支援の手を引いていきましょう。

少人数での活動やペアでの活動は、落ち着いて力が発揮できます。落ち着きのある子どもとペアを組み、教えられたり教えたりする活動は注意が持続しやすくなります。

配慮を必要とする子どもだけでなく、クラスの子どもたちへの援助も大切です。

クラスの子どもたちに対しては、配慮を必要とする子どもに対するネガティブな感情を否定せず、かつ彼らの努力と工夫を認めていくことが大切です。配慮を必要とする子どもと同様に彼らも注目してほしいのです。

彼らも同じように承認されたことで、配慮を必要とする子どもに対して子どもなりのレベルで配慮し始め、互いの違いを受容できるようになっていきます。

教職員間で共通理解を持つと共に家庭との連絡を密にとりましょう。

教職員間で子どもの実態を共通理解し、基本的な対応に一貫性をもたせましょう。また、大人と子どもの両方で、現時点での子どもの目標を話し合い、いろいろな場面で子どものがんばりを認めていきましょう。

保護者も子どもとどのように関わっていいか悩んでいます。教職員が困っていることを保護者へ伝えていく以上に、子どもが学校で少しでもがんばっている様子を保護者と共有し、一緒に考えていく姿勢を大切にしましょう。

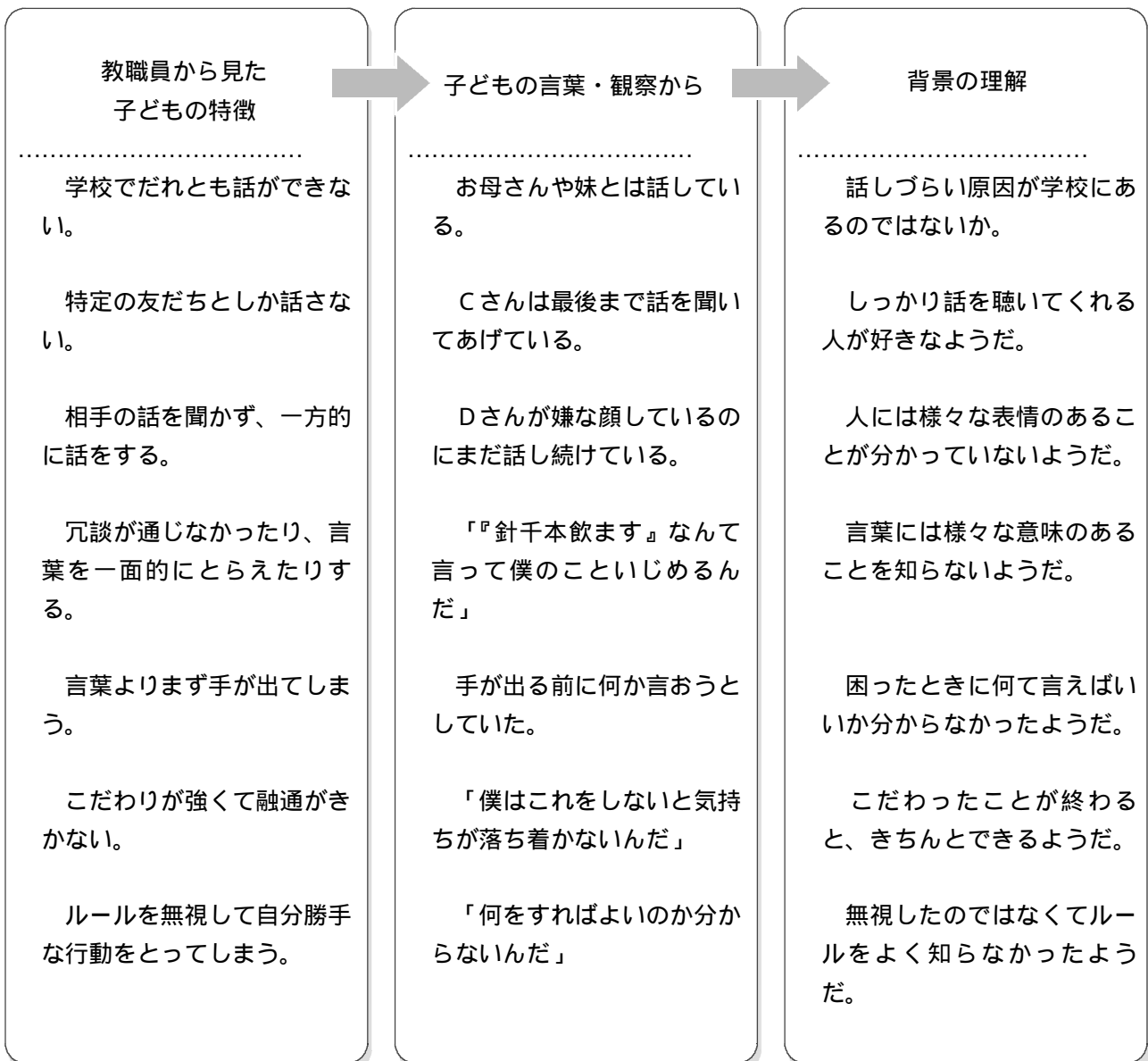


(2)「友だちとケンカになっちゃって怒られたり、ルール違反だって言われることがあるんだけど、何をすればよいのか分からなかったんだ。」



小学校3年生のAさんは、クラスの友だちと授業中でも休み時間でもすぐにケンカをしてしまいます。だれかが軽い気持ちで冗談を言っても、「僕のことをバカにした」と1時間近く大泣きしたり、自分が言われて嫌な気持ちになるのに友だちには「太ってるね」とか「その服男の子のみたいでおかしいよ」と平気で話したりします。相手が反論し出すとぶったり、物を投げつけたりします。教師がケンカの原因を聞いても相手の言った言葉を繰り返すだけなので、どう話を進めていったらよいか悩んでしまいます。

次の表のような特徴がある子どもの場合、話をよく聴き、よく観察してみると、背景が存在していることに気がつきます。



関わり方のポイント

子どもたちが話しやすいクラスの雰囲気づくりに努めます。

クラス全体が他の人の話を最後まで聞けるような雰囲気であればコミュニケーションを苦手とする子どもも話してみようかなという気持ちになりやすいものです。

子どもが伝えやすいコミュニケーションの手段を探します。

言葉を交わすだけがコミュニケーションの方法ではありません。

筆談やジェスチャーが通じやすい場合もあります。

聴覚的な指示だけでなく視覚的な提示も並行して試みます。

特に高機能自閉症の子どもたちは目から入る情報を処理する能力の方が耳から入る情報を処理する能力より優れているので、必要に応じて文字や写真等の使用が有効になります。

ソーシャル・スキル・トレーニングを試みましょう。

これには対人関係に関わるスキルも含まれます。

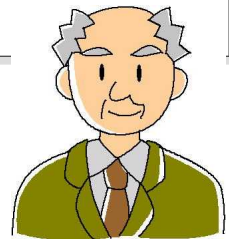
表情の読み取り方、あいさつの仕方、言葉遣い、会話の進め方、困っていることの伝え方、予測のできない変化への対応の仕方などがあります。またゲームのルールから社会的な約束ごとまで身につける必要があります。

こだわりの度合、授業や生活へのこだわりの影響をはかります。

こだわりに対して強く叱り、行動を抑止することはかえってこだわりを強化することにつながったり、ストレスの原因になったりすることがあります。こだわりの度合にもよりますが、具体的な対応方法については専門機関と相談するとよいでしょう。

子どもたちの関係づくりに教職員が加わりましょう。

子どもの特性を学年や学校全体で把握します。



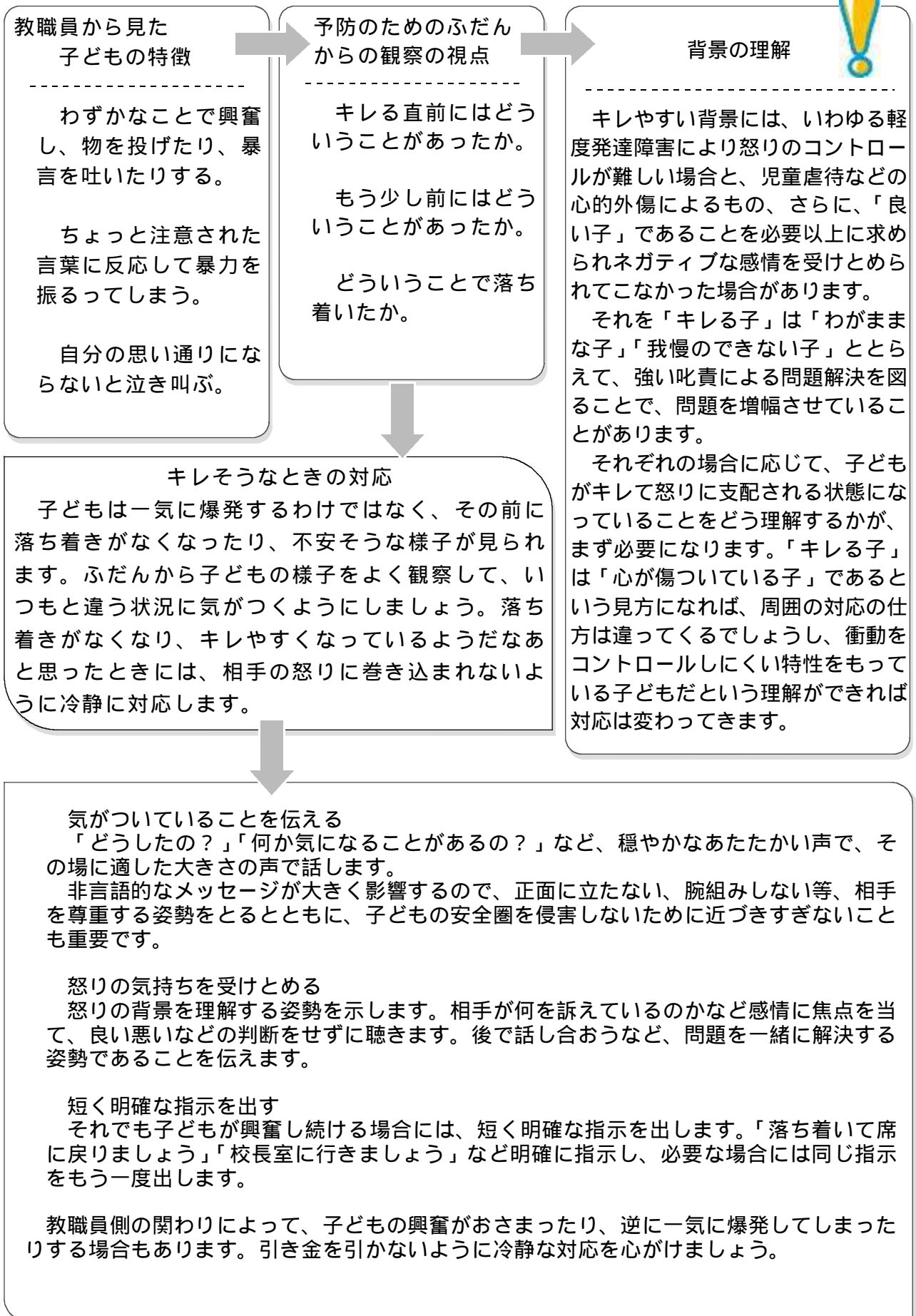
指導援助の留意点

子ども自身が社会的なスキルを身につけていくことは大切です。しかし、クラスや学年の友だち、教職員の理解がなくては二次的な障害を招くことになりかねません。周囲の理解を求めていく方法も模索していく必要があります。

「気づきやアセスメントの中で子どもの特徴が把握できた。やはり、私の言うことが通じないわけだよ。専門機関に任せよう。」と対応をすべて外部機関任せにしてしまうのはどうでしょう。子どもにとって身近にいてくれる教職員が対応してくれてこそ、学校での学習が成り立ち、学校生活が営めるのです。専門機関との連携を通して、学校で何ができるのかを考えていきましょう。

学校での理解ある対応によって、環境が整い、子どもの行動が安定してきました。でも、その子どもが困っているのは、友だち関係だけではないかもしれません。友だち関係がうまくいっていなかったことによって学習面での課題を抱えている場合があります。行動上の問題だけにとらわれることなく学習支援の視点ももっていきましょう。

(3)「後でさあ、『しまった』って気がつくんだけどね。むかつくと頭が真っ白になってキレちゃうんだよ。」



キレてしまった後の対応

前述の「キレそうなときの対応」をしても防げないことがあります。そのような場合には、次にキレることを予防していくために、興奮がおさまった後の対応が重要になります。

覚えていることを聴く

自分がなぜキレてしまったのか説明できないことがあります。どこまで覚えているかを聴くことで、きっかけとなるできごとを把握していくことが大切です。



良い悪いではなく聴く

叱られると思うと、口を閉ざす子どもは少なくありません。良い悪いではなく、子どもの立場にたって、何が起こったのかを聴きます。叱るのではなく、一緒にコントロールしようと考えることが大切です。

キレるパターンを探る

キレるという行動を引き起こす原因を探ります。「どういうときにキレやすい？」と本人に聴いて考えさせます。また同じ状況で必ずキレるのかどうかを探ることが、コントロールの方法へとつながっていくので大切なことです。

気持ちのスケールリング

「むかついた」度合をスケールリングしましょう。少しでもむかつくときれってしまった行動パターンをスケールリングによって、「このくらいのレベルで止められた」というようにしていくことが大切です。

スケールリング・クエスチョン

0～10のレベルなどを使って、抽象的である「気持ち」を具体的に把握するために、「今の怒り度（むかつき度等）は何レベルあたりかな？」と聞きます。

異なる行動をとれる可能性を探る

キレそうになったときに、他にどういう方法があるかを子どもと一緒に考えておきます。大きく深呼吸をしてみる、水を飲みに行く、保健室など冷静になれる場所に行くなど、本人が実行しやすい方法をなるべくたくさん考えることが大切です。

キレることをコントロールできるようになるのは、簡単なことではありません。キレないようにがんばっていたのに、「またキレてしまった」という場合には、いつもとは少し違って上手にできたことをまわりにいる人が見つけて、一歩ずつでも変化していることを認めてあげることが大切です。

クラス全体への取組

予防的な関わりとして、本田（2002）は、キレにくい子どもを育てるための教室でできる啓発教育プログラムを提案しています。グループ体験学習で、感情の理解や怒りのメカニズムの理解などのプログラムを行って、キレにくい子どもを育てていきます。

プログラムの内容

自分の感情理解 怒りのメカニズムの理解
他者の感情理解 共感性を育てる統合授業
コミュニケーションスキルを育てる授業
葛藤に直面する力・課題を解決できる力を育てる
本田恵子著『キレやすい子の理解と対応』
ほんの森出版



参考図書

* 大河原美以著
『怒りをコントロールできない子の理解と援助』金子書房

* A.フォーペル、E.ヘリック、
P.シャープ著（戸田有一訳）
『子どもをキレさせないおとなが逆ギレしない対処法 - 「キレ」の予防と危機介入の実践ガイド』
北大路書房

(4) 「『やればできる！がんばれ！』って言われるんだけどさ、私なりに一生懸命に勉強やってるんだよ。でも覚えられないし、授業分らないからつまらないんだ。」

教職員から見た子どもの特徴

授業中ぼんやりして聞いていない。

どうノートに書いてよいか分からなくて困っている。

勉強をがんばっているのに、テストの結果はよくない。

なかなか覚えられない。

黙って座っていて、机に落書きしたり、手いたずらに熱中して授業に集中しない。

話すことは得意だが、書くことは苦手である。

勉強のやり方がよく分からない。

できないことを気にして、他のことにもやる気がおこらず無気力になっている。

宿題、教科書やノートを忘れる。

授業中、一生懸命学習に取り組んでいるのに、みんなと同じようにやりとげることができない。



背景の理解

学習に苦戦している様子は様々です。そして、子どもたちは自分のできないところを気にして自信をなくし、不安と緊張で情緒的にも不安定な状況になりがちです。そのため、友だちのからかい、保護者や教職員の無理解な態度や言動で傷つきやすく、できない自分に苛立ち、衝動的な行動をとって周囲との関係を悪くしてしまうことも見られます。こうして、学習に苦戦している子どもたちは、授業そのものが大きな苦痛になるばかりではなく、学習活動中心の学校生活の中で、居心地の悪さや居場所のなさを感じ、学校と自分との間に距離を感じてしまうことにつながっていきます。

自己評価が低いために、「どうせやっても無駄」と意欲がもてない。

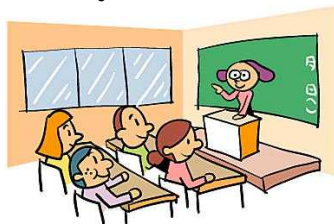
興味・関心に極端な偏りがあり、基礎・基本を身につけるのに苦戦している。

家庭生活でのつまずきがあり、情緒が安定せず、学習に身が入らない。

学習の基本的な技能（ノートのとり方、辞書のひき方、定規等の使い方、副教材の使い方、時間の管理等）が身につけていない。

いわゆる軽度発達障害等、発達のつまずきがあり、どうしても理解や表現がうまくできない。

子どもの理解の道筋と、教職員の指導方法がうまくかみ合わず、学習が分かりにくい。



子どもたちがどんな要因で困難を抱えているのか理解し、日常の授業や生活の観察、さらに、隣の学級担任や教科担任からの情報を含めて、子どもをみる感度を高め、関わりを待っている子どもたちに寄り添いながら、指導と支援のバランスをうまくとり、対応していく必要があります。

関わり方のポイント



- 1 学習に苦戦している子どもたちへの心理的サポートが必要です。

自己評価を高める関わりが求められます。

自分はどうせだめなんだと、自信を失って無気力になっている子どもたちに、やればできる、自分にも力があると思えるような体験や、スモールステップでの問題にチャレンジさせてみましょう。

そしてみんなの前で発表するなど活躍の場を設定・活用して「できた」という実感を持たせ、他者から認められることで自信をつけさせていくことが大切です。

「また失敗するかもしれない」という子どもの不安にも着目します。

その場限りの関わりではなく連続した支援のなかで教職員がじっくり付き合うことが大切です。

勉強ができる・できないだけにとらわれず、人間を多面的にとらえていきます。

たとえ完璧にできなくても今していることは価値あることだと考え、自分のよさや努力の積み重ねに気づかせていきます。そのなかで自己肯定感を高め、自己イメージを書き換えていかれるように支えていくことが大切です。

- 2 子どもたちに学習の基本的な技能 = スキルを身につけさせる工夫が必要です。

学習の内容以前に学習の仕方が分からず学習習慣が身につけていない子どもたちに学習活動の土台であるスキル（本の読み方、話の聞き方、ノートのとり方など）を指導していくことが大切です。

どこができないのか、どのようにできないのか、できていることは何か。

様々な視点で、できるだけ具体的に子どもの実態を把握し、子どもに応じた方法で指導していくことが大切です。

自分に合った勉強法を見つけさせ、少しでも具体的な学習行動に移せるように支援していきます。

例えば、スモールステップでチェックしながら、できたことを認め肯定的にフィードバックし、「これならできる」という子どもの実感を持たせていくことが大切です。

- 3 子どもに分かりやすく教えられるよう、授業スキルを磨いていきましょう。

コミュニケーションスキルは大切な要素です。

子どもの言っていることの内容と気持ちを受けとめて聴き、明確な指示・発問・説明をするなど、子どもに合わせたコミュニケーションをとることが大切です。

言語的表現に頼りすぎない指導を心がけましょう。

絵や図を使って視覚的に訴えたり、作業により五感を通して具体的に理解させたりするなど、指導の工夫が大切です。

その子どもに合った学習方法を見つけることで、学習への苦戦を少なくすることができます。

一人ひとりの子どもにとってやりやすい学習方法は異なります。その子の好きなことや得意なことの中に、そのヒントがあるので、よく観察することが大切です。



(5) 「大人は気づいてないけどさ、時々疲れたって感じるとき、確かにあるよ！」

教職員から見た
子どもの特徴

「良い子」というと、教職員は特に問題がない、支援の必要のない子どもと思いがちですが、本当に困っていることはないのでしょうか。

素直で教職員や大人の言うことをよくきく。

明るく、クラスの雰囲気盛り上げてくれる。

面倒見がよく、自分のことより人のために何かをしてあげようとする。

自分のことは人に頼らず自分でやるので、手がからない。

しっかりしていて、合理的な考え方をする。

苦戦している背景

「良い子」でいようとするとあまり、息苦しさや葛藤を感じながらも、無理をし、がんばりすぎる子どもがいます。むしろ、「良い子」であるが故に、困っていることを見過ごされてしまう可能性が高い子どもたちといえます。

素直で「人の要求に応えなければ」「期待を裏切ってはいけない」「失敗をしてはいけない」等、常に気にしながら生活している子どもは、評価を気にしながら、きちんとできるか不安や心配を抱え、我慢をしているという側面ももっています。

明るくふるまい、友だちに合わせようと、一生懸命まわりに愛想を振りまいている子どもは、友だちに認められるかどうかと不安を抱えながら、本音を出さずに生活しているという側面ももっています。

面倒見がよく、親切心が強すぎて、世話をやきすぎている子どもは、自分自身が疲れて、自分のことができなくなっているかもしれません。

手がからず、「自分のことは自分でやらなければ」「甘えてはいけない」と無理をしている子どもは、まわりの期待に応えようと、がんばりすぎて苦しいかもしれません。

しっかりしていて、合理的な考え方をする子どもは、損得で物事を判断するため、まわりの人の感情や思いをくみ取れず、クラスで本当は受け入れられていないかもしれません。

関わり方のポイント

1 見方を変えてみましょう。

「良い子」は、がんばり過ぎてエネルギー不足になっていたり、限界まで無理をしていたり、人間関係がうまくいっていかなくなったりすることがあります。このような状態になることを防ぐためには、「この子は無理をしていないか、困っていないか」という認識をもって子どもを見るのが大切です。

2 子どもの思いをくみ取りましょう。

「良い子」は、自分自身の思っていること、感じていることを教職員とじっくり話し合う機会がないことが多い場合があります。今の自分を本当はどう思っているのか、どう感じているのかなど、自分の心と向き合うきっかけをつくる必要があります。

人の要求に応えなければ、人に合わせなければ、甘えてはいけないなどの思いこみに対して、無理をする必要はなく自分のやれる範囲でやればよいことを伝えます。

がんばっていることを認めながら、自分が良いと思ってやっていることでも、まわりや他人にとっては不快と感じる場合があることにも気づかせます。

3 感情交流のうまくいくような学級の雰囲気づくりにより、学級を安心できる居場所にしましょう。

参考：吉田隆江・森田勇・吉澤克彦編集『育てるカウンセリングによる教室課題対応全書7 教室で気になる子』

(6) 「せんせい！おなか、痛い（あたま、痛い）」



問題や悩みを抱えながらも、うまく言葉で伝えられない、表現できないなどのため、SOSサインで支援を求めている子がいます。

様々なサインに気づく

腹痛、頭痛など、身体的症状を訴えることが多くあります。

腹痛や頭痛などの身体的症状を訴えて保健室を訪れ、養護教諭がそれをサインとして受けとめ、受け入れることから、子どもが支援を必要としていることに気づくケースが多くあります。子どもが保健室に「相談のために来ました」ということはあまりなく、ほとんどが身体的不調を訴えて来室するため、養護教諭は常に身体的な訴えに対して手当てを行うと同時に、心の問題がないか配慮して接する必要があります。それが、サインを敏感に受けとめることにつながります。子ども自身も、身体的症状をきっかけとして、養護教諭とのやりとりの中で、自分のことを話しやすくなるという利点もあります。養護教諭が得た情報は担任に伝えたり、学校内組織で共有することで、支援へと広がっていきます。

「いつもとちょっと違うな」「何か変わったな」と感じる、気がかりな行動、態度をとることがあります。

ちょっとした変化をサインとして見逃さないように、感じ取ることができるようにアンテナを高くしていること、担任一人ではなく関わる教職員全員が見ていくこと、そして情報を共有すること等が必要です。

関わり方のポイント

一対一で対応し、様子や事情をよく聴くことが基本です。

身体的症状を訴える場合、保健室での対応で落ち着くこともありますが、症状が継続し、訴えを繰り返す場合も多いため、「またか」という態度をとってしまうこともあるのではないのでしょうか。

自分に自信がもてない子どもが多いので、「あなたを心配している」「大切に思っている」というメッセージを伝えることが必要なのです。

そして、身体症状に対しては、最初から心因性と決めつけず、まず訴えを受けとめ、保護者と連絡をとり、医療機関を受診するよう勧めることが大切です。実際には、疾病等の異常が発見される場合もあり、心因性と決めつけるのは危険です。

疾病等の異常はないと判断されたならば、担任、養護教諭等関わりが深い教職員が中心になって、子どもが何に困っているか、子どもが抱えている問題は何かの把握に努めます。

次に、症状が起こることに対してどう対応していけばよいか、問題を解消していくために何ができるか、保護者と連絡をとりながら、子どもと一緒に考えていきます。また、専門医の診療・指導や専門家の支援が必要な場合は医療機関や相談機関の対応が必要な場合もあるため、学校と関係機関の連携もポイントになっていきます。

行動や態度によるサインが出ている場合、声をかける際は、注意をしたり、なぜ行動や態度が変わったのかという原因を追及するような問いかけをするのではなく、気にかけていること、どうしたのか心配をしていることが伝わるようにします。そして、じっくり子どもの思いを聴くことが大切です。

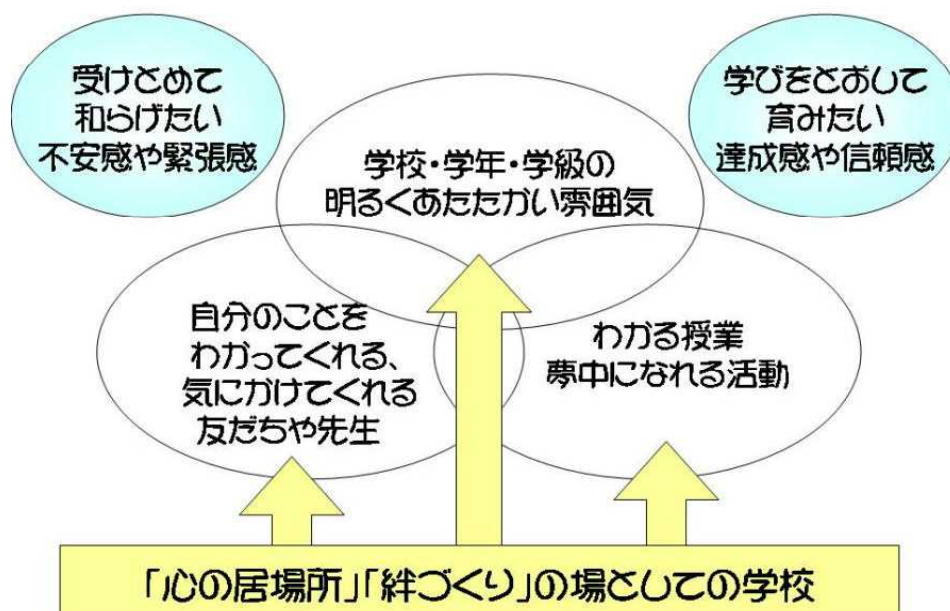


学ぶ喜びを実感できる魅力ある学校づくりへの視点

不登校という課題から見えてきたことも含め、より積極的な意味で魅力ある学校づくりを推進していくことが重要です。各学校では、様々な活動を通して、子どもたちの不安感や緊張感を和らげ、達成感や自分や仲間に対する信頼感を高めていくために、具体的な取組を進めていくことが大切です。

一人ひとりの子どもをどのように理解し、どのような教育活動をどのように展開していくのか、という教育の基本的な視点に立ち返り、学校づくりのポイントをまとめると、次のようになります。30のチェックポイントを例示しましたので、自分や自校が何を目指し、何を大切にしているか、そして何が課題かをはっきりさせるための振り返りの視点としてご活用ください。

学ぶ喜びを実感できる魅力ある学校づくり



「心の居場所」と「絆づくり」の場としての学校

「心の居場所」と「絆づくり」は、決して切り離すことのできないものである。学校・学級において、一人ひとりの児童生徒が、かけがえのない存在として大切にされている、認められているという思いと喜びを実感できるとき、そこは「心の居場所」となる。そして、お互いの心の結びつきや信頼感の中で主体的な学びを進め、共同の活動や体験を通して社会性を身につける「絆づくり」の場として、豊かな学校・学級が形成されていく。

このように、「心の居場所」は「絆づくり」を生み出す基盤であるが、また、「絆づくり」は「心の居場所」を一層豊かにしていく力となる。同学年・異学年での多彩な活動、学校間や学校段階等を超えた幼児・児童・生徒の交流、さらに、地域に生きる様々な大人たちとの出会いと交流など、そこでの「絆づくり」の努力こそ、学校・学級はもとより私たちの生きる地域を、より豊かな「心の居場所」へと進めていくであろう。

(「不登校への対応と学校の取組について」平成16年7月)

学校・学年・学級の明るくあたたかい雰囲気

校長が魅力的で実現可能なビジョンを教職員に示し、それをみんなで共有している。教職員が持ち味を發揮し、生き生きとしていてコミュニケーションもよくとれている。子どもたち一人ひとりの願いが大切にされ、その実現に向かって前進していることが子どもたちに実感できる。

入学や進級の際などの不安や緊張感を受けとめ、それを和らげる方策を実行している。朝会や行事等での教職員の話が魅力的で分かりやすい。

教職員が大きな声で子どもを叱ったり、命令したりすることがない。

いじめや暴力は絶対に許さないという考えで、問題行動に毅然と対応している。

教職員が一人で問題を抱え込んでしまうのではなく、チームや学校全体で対応している。

教室、廊下、階段やトイレ等が明るくきれいで、気持ちよく生活できる。

安心して校舎内で過ごしたり、運動場で遊んだりすることができる。

自分との関わりを意識し、心を寄せて取り組める学年・学級目標がある。

認め合ったり、励まし合ったり、協力し合ったりすることができる。

自分のことを分かってくれる、気にかけてくれる友だちや先生

「子どもは、伸びたい、認められたい、仲間の一員でありたいと思っている」という子ども観を教職員が共通にもっている。

「一人ひとりを、いいところや直した方がいいところをもった人間として丸ごと理解しよう」としている。

「子どもは変わっていく」という考えと、その変化に気づく心をもっている。

より多くの人によって、子どもを理解しようとしている。

夢や希望、困っていることや悩み等を話せる友だちや先生がいる。

子どもへの声かけを大切にするとともに、教育相談なども日常的に実施している。

「困っているのはだれか」という視点を持ち、適切な支援を心がけている。

「不登校はだれにでも起こりうる」という認識をもっている。

分かる授業、夢中になれる活動

学ぶ意欲や喜びを大切にし、きめ細かい学習活動を展開している。

分からないことが分からない、できないことができないと言える雰囲気がある。

一人ひとりの違いが個性として尊重され、自分の力を發揮したり、共に高め合ったりできる。

体験的な活動、問題解決的な学習等を重視している。

自分のペースや興味・関心に合った活動を選択できる機会がある。

試行錯誤したり、挑戦したりする機会がある。

学習の振り返りの機会があり、学習の結果とともに学習の過程を大切にしている。

共につくる活動や競い合う活動をバランスよく計画・実施している。

学校や地域の特色を生かした活動があり、いろいろな人とふれあうことができる。

学校全体で、カリキュラムや授業の改善に継続的に取り組んでいる。